原爆惨状絵図 オ11号

「660の棺桶が並んだ 銭座町疎開跡地!!」

この場面は、昭和20年8月13日のことでした。

原爆投下により、爆死した、製鋼所、茂里町兵器製作所、造船所幸町工場の従業員、動員学徒、女子挺身隊の棺桶でした。

場所は、銭座町の現在の井上病院の附近です。

当時 この場所は 建物疎開で家が引き倒されて、2000坪ばかりの広場でした。

ここに、三菱製鋼、茂里町兵器で亡くなった人が 棺桶におさめられて つぎつぎに この場所に運び込まれて 荼毘に附されることとなったのでした。

この状況を 水江オケさんの 主人も このなかに いたわけでした。

しかしながら よく考えてみると、660の 棺桶が よくそろえたものだと、不思議がる人もあるが、それには 次のような事情があったのでした。

昭和20年8月1日、長崎市は、B24, B25による 数十機の編隊の大空襲が ありました。そのとき、三菱造船、大学病院など 数十ヶ所に 250k 爆弾が 投下され、死者1000名 負傷者 数千名を出したわけでした。　その際、三菱造船が 数百名の死者に 棺桶が足らず 毛布に くるんで 死体を家族に 渡けたのでした。

そこで 天下の 三菱ともあろうものが この状況では 恥であると云うことで、三菱の 木工場で 棺桶を用意していたと云うことでした。

証言者

- 水江　オケ
  （大正4年 8月20日生）
- 当時の住所
  長崎市 御船蔵町[redacted]

水江オケさんは 先夫、水江政夫は、昭和12年に支那事変において 戦死し、その後、弟 水江実さんと再婚して、2名のお子さんができたのでした。

ところが、水江実さんが 三菱兵器茂里町工場において、昭和20年8月9日 即死した。

被爆惨状絵図 12号

「私の夫が 紅蓮の炎に」

銭座町の 井上 病院附近の 疎開広場に 並べられた 棺桶 660体に火がつけられたのが、昭和20年8月13日 午後7時に点火されたのでした。

そこには 警防団、工場関係者、消防署の人等、30名前後の立合人でした。

水江さん，水江さんの主人の弟 妹むこと3人で、午後11時頃に 現場に行って 燃えさかる 火の手を 見ておりました。

石油100缶を 添えて 燃やしたため、炎が 数百米にも 達したと 思われます。

14日の あけ方までは 燃えていたと、思います。

なお、私は 主人の遺骨は、14日の夕方に 現場に行ってもらいました。

勿論 660体の 合骨が、白の木箱に きれいに 入れてありました。

しかし、私のごとき、遺族は、みんな 恐ろしがって 誰ひとりおりませんでした。

被爆惨状絵図 13号

「長崎市 松山町 下の川から見た 被災状況」

昭和20年8月10日 午前4時、原爆の翌日でした。
私の疎開先である、長与町 百里野を出発しました。
道の尾を過ぎて 六地蔵のところで、警防団に入市を断られました。
行き先の 銀座町には 家族がいるからとお願いして、許可をもらいました。
午前6時頃、住吉町の附近では、飛行機が来て 機銃掃射を受けました。
岩屋橋附近にあった ガスタンク3台が爆発しており、特別の焼死であったと思います。
ガスの影響ですが みなさん、赤バナ、黒バナ、青バナと、鼻のたれ方がちがっておりました。
御船蔵町の自宅に着いたのが、午後2時30分頃で、姑さんから泣いて抱きつかれました。
この画面の左手前が 三菱球場、その先が、製鋼所第二工場、川向いは、竹之久保町、川には数百の死体がありました。

◎ 証言者　　水江 ヤケ

被爆惨状絵図 14号

「660の遺体焼却で 全市が 火事のようだった」

この場面は、660の棺桶が 焼えさかる中を 鍛冶屋小学校 後の附近による 高台から、造船所幸町工場、三菱兵器茂里町工場、更に 対岸の 造船所の木型場を 眺めたところです。
百缶の石油を 油入(注)しての 遺体焼却の ために 数百米に 及ぶ 火柱で、全市が あたかも 燃えているような 錯覚を おぼえたと 云うくらい、凄しい 大火柱だったと 思います。

そのとき 山の中に 避難していた人が 山の中で 懐中電燈もいらず、新聞が 読めたと 云って おりました。

長崎市は 周囲が 山で 囲まれているので、そのようであったと 思います。

なお、対岸の 造船所木型場で 660の棺桶は つくられたと、思います。

◎ 製作所　　水江 才ケ
　　長谷川 誠

被爆惨状絵図 15号

「生きながら 焼かれた少女」

この場面は、昭和20年8月9日 午前11時、原子爆弾が投下されたとき、長崎市鍛座小学校の横で 聖徳寺の下の附近で起ったことです。

はりの下敷になっている少女は 長崎市 浦国民学校に在学中で、学徒報国隊として出動中でしたが たまたま、その日は体調が悪かったのか、その日は家にいたわけでした。

その少女の名前は、浦上トシ子(14才)さんです。

はりの下敷となっていたので、お母さんが、それを動かそうとして、努力しましたが、そのはりを動かすことができなかった、誰かと云っても、皆さんが被災者のため、誰ひとり手伝うことができなかった。

そのうち、火が廻って来た、それで 浦上トシ子さんは、「お母さん! 速く逃げて!、私はいいから」と、叫ぶので、止むなく防空壕へと お母さんは 逃げたそうです。

夕方 鎮火したので、自宅に帰ってみると、家はすっかり焼けて、娘は、白骨となっていたそうです。　浦上さんの お母さんは、同じ年輩の娘と会うたびに、泣きながら当時のことを語っておられました。

◎証言者 ・住所　長崎市 天神町[redacted]
村里 鶴枝 (昭和6年4月18日生)
・当時の身分　浦国民学校報国隊、大橋兵器工場 いもの工場
・負傷　全身を火傷しておりました。

被爆惨状絵図 16号

「銭座町 山の手に 逃げて行く 被災者達」

私が 茂里町兵器工場に おいて、負傷して、銭座町を通過して山の手に 逃げて 行くときの 情景です。

老若男女が 負傷して 血まみれに なっている人もあり、無きづの人もあったが、皆さん、服装が 乱れており、わめき ながら、あの坂道を 登って 行きました。

その時刻は、原爆が 落ちてから 半時間たった 即ち、昭和20年8月9日 午前11時40分頃であったと 思います。

私も、右腕を 大きく 負傷しており、その他 身体さ あちこち、怪我をして 為、途中、何度も 休みながら 焼けた土を 踏みしめて、登って 行きました。

山の手の 登り切った ところに 恐らく 数百名の 被災者が いたのでは ないかと 思います。

◎ 証言者

・当時の住所　長崎市 竹之久保町 [redacted]

氏名　下谷 富太郎
（大正14年4月23日）

所属　茂里町 三菱兵器工場
第三仕上工場
徴用工

被爆惨状絵図 17号

「目覚町から 山の手へ 逃げてゆく被災者達」

それは、原爆投下から 半時間ばかり 経過した時のことでした。
現在の聖徳寺下の 防空壕に 多数の被災者が 押しかけて
来て 既に満員となっておりました。

私も はじめ あの防空壕に 逃げこもうと思っていましたが……

そこで止むなく、目覚町の方を通って 山の手の安全な ところ
をねらって 坂道をあえぎながら 登っておりました。

途中で 助けてくれと 呼びかけられましたが 私自身が これだ
けの負傷をしているため、人を助けることなんか、とても出来ない
ことでした。

又、途中で 水を水をと云われても、私も 水筒を持っている
わけでなく、黙って その場所を 通り過ぎました。

◎ 証言者　下谷 富太郎
（大正14年 4月 23日）

当時の住所、長崎市 竹之久保町
[redacted]

〃 職場　城里町 三菱兵器工場
第三仕上工場
徴用工

被爆惨状絵図 18号

「 浜平町 山の手附近で いこう被災者達 」

この場面は、昭和20年8月9日午后1時頃のことでした。

三菱製鋼、三菱兵器茂里町工場三菱造船などの従業員、動員学徒 女子挺身隊、又、銭座町，目覚町の被災者達が、山の手にある浜平町の旧砲台跡地附近に退避して来たところです。その数は、数百名から壱千名を越える数字でした。

被災者達は林の中に、タムロしてただ黙って横になったり寝そべっており、会話する人は1人もいなかった。ときおり傷の痛みからうめき声をあげる人もいましたが、しばらくしてから、三菱の関係工場の係員が数名の人が登って来て、誰か被災者を探していました。

なお、銭座町の旧砲台跡は、たしか大砲4門が長崎港の外国の軍艦を射程距離としてにらみをきかしており、昭和の時代となり、撤去される運命となりその跡が，1000坪ばかりの広場となり、子供達の遊び場所となっていたところです。

◎証言者　下谷富太郎

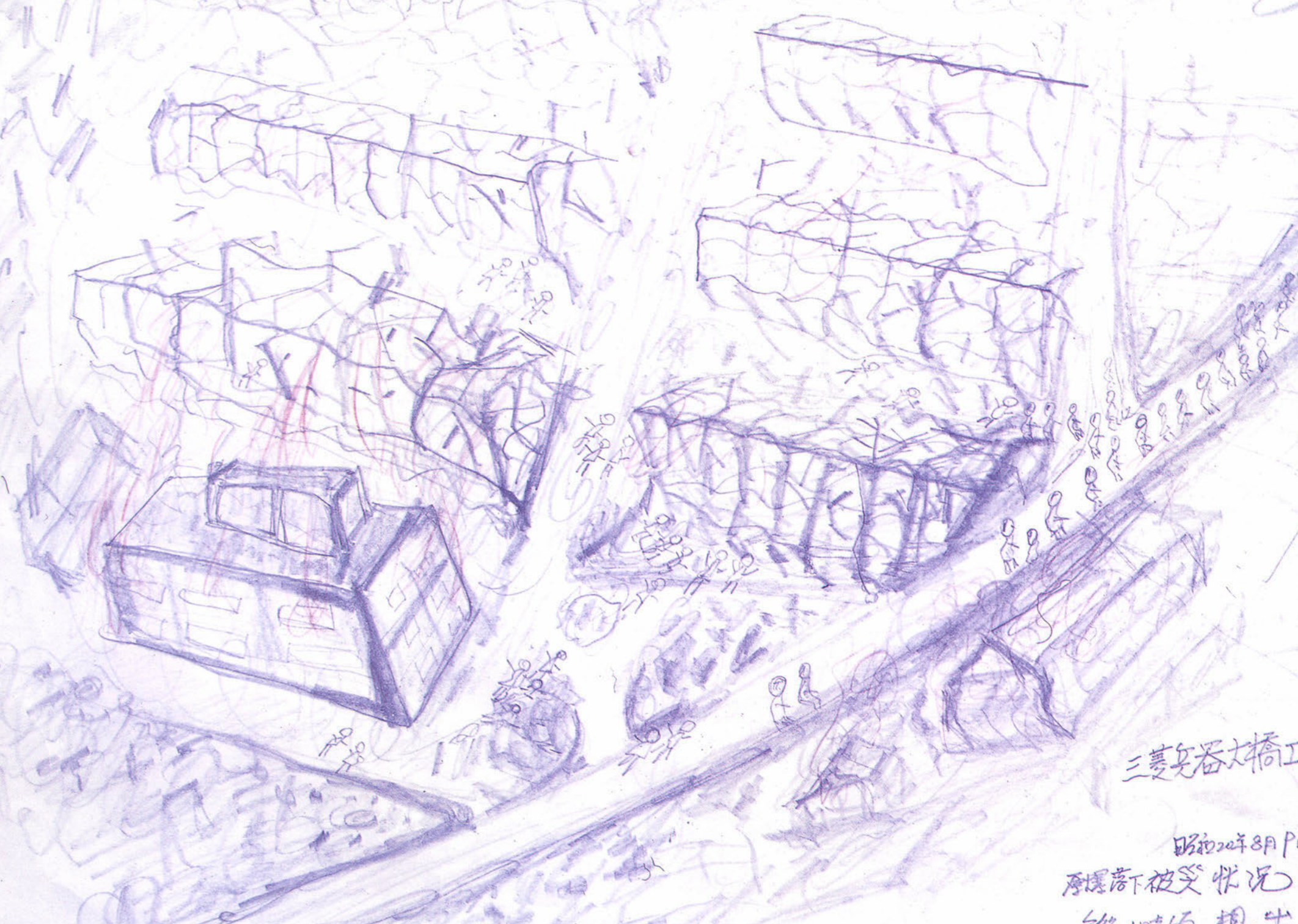
（大正14年4月23日）

当時の住所　長崎市 竹之久保町 [redacted]

〃　職場　茂里町 三菱兵器工場

〃三仕上工場

徴用工


三菱兵器大橋工
昭和20年8月P
原爆落下被災状況

被爆惨状絵図 第19号

「私は、三菱兵器大橋工場の鋳造工場で被爆した」

この画面は、昭和20年8月9日午前11時、私が三菱兵器大橋工場鋳造工場、池田組において、魚雷推進器（スクリュー）鋳型製作中でした。

ピカッ 黄色、電気がショートしたような感じ、その瞬間15米位吹飛され、屋根材下敷になって意識を失ない、全く動くことができなかった。

約1時間経過して意識が回復と同時に無我夢中で昭和町方面の林へ避難した。

避難途中負傷して助けを求める者、火傷して皮ふがボロボロになり「水を」「水を」と泣き叫ぶ者とても悲惨で残酷でありました。

私自身も全身、真赤に血で染まり頭部、背中、足など負傷し道の尾駅から救護列車で大村海軍病院に入院した。

◎ 証言者　大平力男（67才）

長崎市油木町 [redacted]

身分　三菱工業青年学校（2年在学中）

被爆場所　三菱兵器大橋製作所、鋳造工場

<追伸>

なお、私は（8月9日）救護列車第4号で、午後9時発、道の尾駅より乗車したものと思います。

（19号）

原爆惨状絵図教室　解説

とき	昭和20年8月9日午前11時頃。
ところ	三菱兵器大橋工場、鋳物工場 池田組
情況説明	

この画面は昭和20年8月9日午前11時、私が三菱兵器大橋工場鋳造工場、池田組において魚雷推進器（スクリュー）鋳型製作中でした。ピカッ黄色、電気がショートしたような感じ、その瞬間15米位吹飛ばされ屋根材の下敷になって意識を失い、全く動くことができなかった。約1時間経過して意識が回復と同時に無我夢中で昭和町方面の林へ避難した。避難途中負傷して助けを求める者。火傷して皮ふがボロボロになり水を水をと泣き叫ぶ者とても悲惨で残酷でありました

私し自身も全身、真赤に血で染まり頭部、背中、足など負傷し道の尾駅から救護列車で大村海軍病院に入院した。

被爆者の全容	
被爆当時の住所	長崎市油木町 [redacted]
〃 〃 氏名	大平力男（大平）
身分	三菱工業青年学校（2年在学中）
被爆場所	三菱兵器大橋製作所 鋳造工場
負傷の有無	負傷、頭部（救護列車）大村海軍病院に入院
生年月日	昭和4年10月22日

被爆惨状絵図 第20号

"廃墟と化した浦上天主堂"

浦上天主堂は、当時壱万人の信者がいると云われておりました。

この天主堂は、信者が煉瓦を一枚、一枚買って、東洋一の大天主堂を作ったもので、信者の血と汗の結晶であったわけでした。

昭和20年8月9日は、聖母の被昇天のお祝日が、8月15日となっていたため、教会には信者数拾名が、人の世の罪のざんげをするため、参拝に来ていたものだと云われておりました。

教会の近くに住む、深堀勇さんの証言によれば教会は、前方の方は、前般的に残っており、大きなヒビが走っており、8月9日の夜中においては、天主堂の階上に備蓄してあった食糧品、中でも缶詰がパンパンと割れる音が聞えたそうです。

◎証言者　深堀　勇
長崎市上野町[redacted]
TEL [redacted]

ミサ聖祭に行ったとき、2階の廻廊を見上げると、食糧の備蓄は、木の箱（長さ1.2m、横70cm、高さ50cm程度）が、500から1000個程度を並べられていた。これが原爆により破壊されたため、近くの人々の非常食料となったと聞いております。

◎証言者　深堀　勝一
長崎市坂本[redacted]

被爆惨状絵図 21号

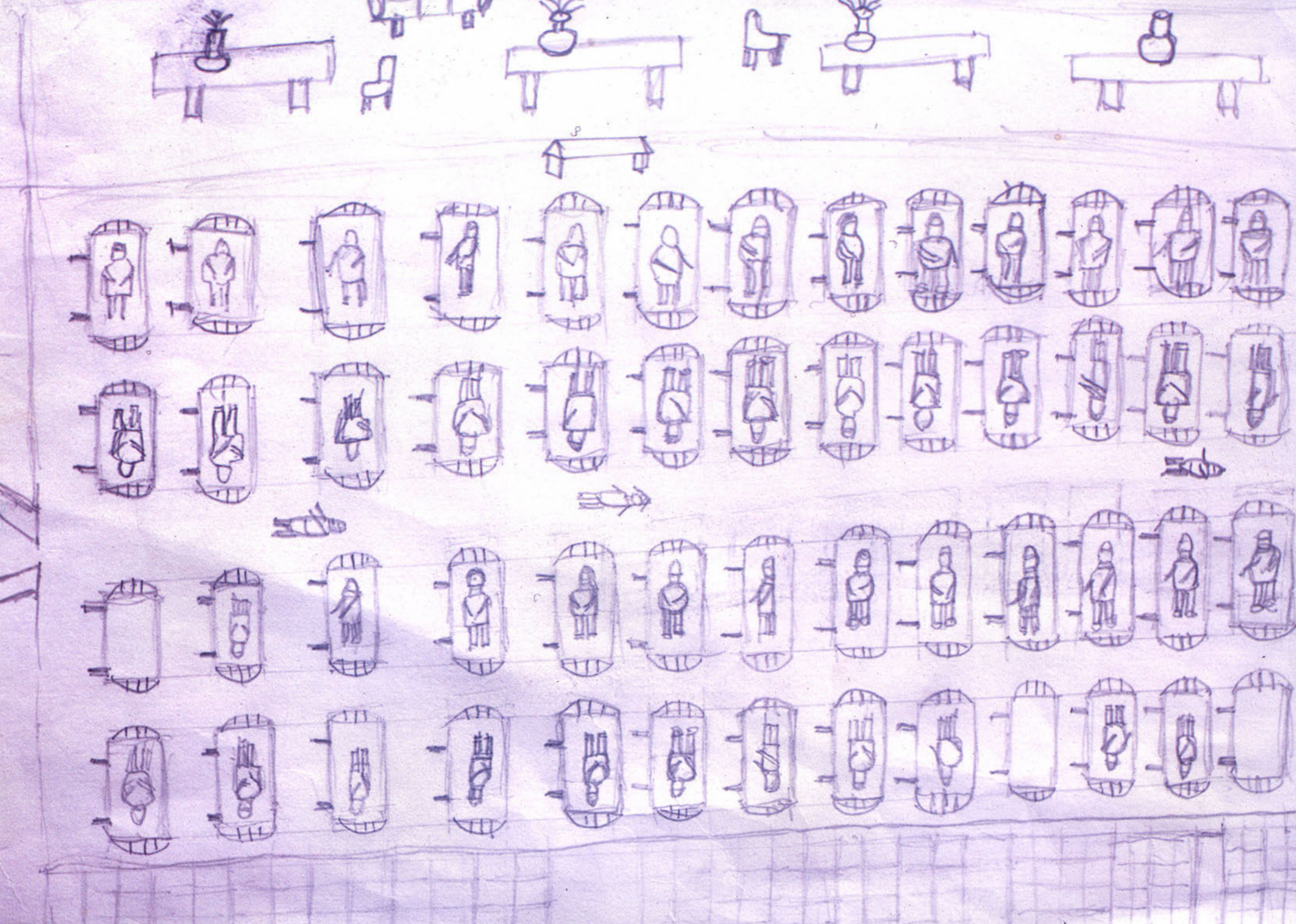
「私の手で焼いたお友達」

この場面の左上のところで、私がやいているところです。
永田カツミさん、永田清子、永田レイ子、
永田法子の4名です。
私の家の上の家の人4名です。
私の家の上の家の人で、ふだんから、仲よしのお友達でした。
この4名の兄弟姉妹は、お家が農業でしたので、よく私達の家に遊びに来られた人達です。
この方々を焼くときは、雨がひどくて、なかなか燃えつかず苦労しました。
原爆のときの負傷は、全くなく元気でしたが、だんだん身体を悪くされて亡くなって行かれました。
今日、考えてみれば爆心地から距離が500米で放射線障害で亡くなくなられたと思います。

◎ 証言者　大塚 美智子
（昭和7年5月3日生）

・当時の住所　長崎市城山町[redacted]
長崎市の純心女学校1年生

・現在の症状　爆心地より500米の至近距離でした。
目、耳に障害があり、
なお、狭心症です。



被爆体験絵図22号

「大村海軍病院 第10病棟」

この場面は、昭和20年8月10日 午前5時頃のことでした。

長崎の原子爆弾に負傷者が救援列車第3号車に乗せられて大村駅に運び込まれ、そこでおろされ、警防団、消防団、国防婦人会などの手でトラック、消防自動車に乗せられて、真っ暗な夜道を海軍病院へと突進したのでした。

私も消防自動車に乗せられ、途中、敵機の攻撃があり、ライトをつけた車をおとりにして、川棚方面へ誘導して、ことなきを得て、海軍病院へと行き、そこで入院となったのでした。

私は、そこで要担患者と名づけられて、診療室で直ちにカンフル2本を打たれたのでした。

その時間は、長崎を7時前後に出発したのでしたので、大村駅が午後9時半頃で、病院までの収容時間は、1時間かかり、即ち、午後10時30分頃だったと思います。

大村海軍病院には、傷痍軍人が数百人に入院していたようですが、その人達が二階にあげられて、一階の方はすべて、長崎原爆の被災者でした。

傷痍軍人の皆さんもベットからおりて、一階の負傷者の側に来て"頑張れよ これくらいの負傷で死ぬもんか"とはげまして夜中まで、看病を続けてくれました。

翌朝、明るくなってみると、第10病棟の一階大広間には凡そ100名前後の人が入院しており、既に15名程度の人が死人でおりました。

ところで8月9日から数日間、長崎市から入院が続き700名前後の人が入院していたと思います。

私も近くのベッドに長崎県立高女の村崎圭子さんがかなり重傷で入院しており、看病に来ておられたおかさんと、妹章子さんとはときどき立話をしておりました。

私が大村海軍病院に入院して一番感じたことは、海軍病院の看護婦さんは何故こんなに色が白いのでしょうかと、思いました。

それは、あとで理由が判りました。原爆に会ったものは皮ふにコールタールがぬられているようだったからです。

◎証言者　村崎圭子（昭和3年4月2日生）

・当時の住所 長崎市伊良林町[redacted]

長崎県立高女報国隊

なお、村崎圭子さんの兄さんは、東大工学部出身のエリート技術官でしたが、おなじ兵器大橋工場で爆死されました。

!! 私は、あの設備のよい大村海軍病院だったから今日まで生きているのよ 医師、看護婦など皆さんが親切にして頂き、今も感謝しています。　深堀勝一　合作による

!! 村崎圭子

大村海軍病院には、終戦直前には、15病棟あり被爆者が700人入院したと云われております。

海軍病院でしたので、廊下の掃除を甲板掃除と呼んでおり、成程ここは、海軍病院だなあーと思いました。

私が入院して驚ろいたことには、海軍病院には、日赤の看護婦さんがおり、最高のお世話をして頂き、他の病院のごとき病人から苦情はひとつもでなかった。

さすがきたえられた人々だなあーとも思いました。

又、日赤の看護婦さんはなんてこんなに色が白いのだろうかとも思いました。

それが、50年後の今日判かったのは、長崎原爆により入院した人々は、みんなコールタールのようなものが皮膚に附着していたからだそうです。　そう云えば、8月10日原爆被爆の翌日、となりのベッドに寝ていた女子挺身隊のお姉さんが顔が汚れているからとタオルで顔をふいてもらったのですが、3回ふいてもらってやっと汚れがとれたと云っておりました。

それ程までに長崎の被爆者がよごれていたわけでした。

◎証言者　深堀勝一（68才）

長崎市坂本[redacted]

長崎県被爆者手帳友の会々長